



社会福祉法人松涛会 地域交流型・高齢者多機能 複合介護施設「フロイデ金比羅」

施設DATA

【所在地】山口県下関市金比羅町10-1

【TEL】083-227-2812

【ホームページ】<http://www.syoutokai.or.jp/>



↑小規模多機能型居宅介護のサービスを受けて、楽しく過ごす利用者



←斎藤妙子副理事長、川瀬英盛事務長との再会を喜ぶ利用者

**特養、小規模多機能、サ高住等を
一施設に集約。〆住み替え〆を可能に
することによって地域での生活を支える**

山口県下関市の社会福祉法人松涛会は、グループの医療法人松涛会とともに、高齢者医療・介護・福祉を一体的に提供している。2014年12月には、特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護、サービス付き高齢者向け住宅等を一施設に集約した「地域交流型・高齢者多機能複合介護施設『フロイデ金比羅』」を開設。最期まで地域で暮らし続けられる支援体制を強化している。



↑ ゆったりとしたスペースの短期入所フロア



↑ 斎藤妙子副理事長



↑ 地域の人たちにも開放する多目的ホール
← 家族の方たちにも人気の喫茶



↑ 小原良江副施設長

医療・介護の連携による 安心・安全を市内全域で提供

松涛会グループは1960年の創立以来、下関市の彦島地区、安岡地区、山の田地区に順次拠点をづくり、医療と介護と福祉の連携によるサービスを提供してきた。

安岡地区では、安岡病院を核に特別養護老人ホーム（以下、特養）や老人保健施設、グループホーム、小規模多機能型居宅介護（以下、小規模多機能）、住宅型有料老人ホーム等を展開。

彦島地区では、彦島内科を中心に各種訪問サービスのほかサテライト型特養を開設し、地域に向かう医療・介護を提供している。2010年に市内中心部に開設した「ケアタウン山の田」は、山の田内科を軸に小規模多機能やグループホーム、サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）を展開している。

斎藤妙子副理事長は「地域包括ケア時代を迎えるにあたり、介護度の高い人から低い人まで、ワンストップでサービスを提供できる体制が必要だと考えました。金比羅地区に開設した『フロイデ金比羅』は、多様なサービスを必要とする

方や、元気な方が体調や状況の変化によって同一施設内で住み替えられる施設を目標にしています」と語る。

同施設の1階は、小規模多機能（29人定員）、グループホーム（1ユニット）、2階は特養（29人定員）、3階は短期入所生活介護（29人定員）、4階と5階はサ高住（12室となっている）。

たとえば、比較的元気なうちはサ高住に住み、日中は小規模多機能を利用。認知症になったり、手厚い介護が必要になった場合には、施設内のグループホームや特養に住み替えることで、最期まで住み慣れた地域、建物で暮らすことが可能になるのだ。

また、同施設は短期入所定員を「29人」と多めに設定しているのも特色だ。

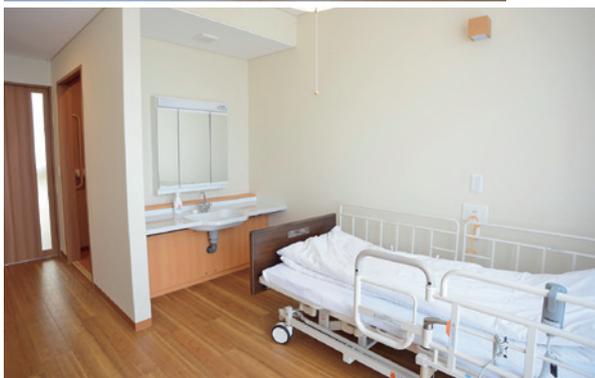
斎藤副理事長は「今後は短期入所の活用が重要になると考えています。特養への入所待機者を受け入れるほか、在宅生活を希望する人の計画的な利用や家族のレスパイトなど、期待される機能は多い。地域が求めるニーズに応えるために、短期入所を柔軟に活用してもらいたい」と話す。



↑個別に利用できるヒノキ風呂
←サ高住の居室はトイレ、キッチン、浴室と2部屋(37.87㎡)を完備(Aタイプ)



↑明るい光が差し込む中庭



↑特養では、医療度が高い人も受け入れている



↑青木繁「海の幸」陶板レリーフが迎える玄関
←介護職の身体的負担を考慮しリフト浴を導入

看護職員が24時間常駐 医療度の高い利用者を受け入れ

同施設は、看護職員を多く配置していることも特徴の1つだ。看護職員の24時間常駐により、医療面の安心を確保。看取りまでを視野に入れた支援体制を整えている。看護職員が多いと医療的側面のみを重視するのではないかと危惧されるが、同施設では「利用者がどのように生活したいのか」を重視したケアを基本に置いている。

副施設長の小原良江さんは、岡病院長の元看護部長。同施設開設にあたり、法人グループの介護事業所で研修を積んだ。

「看護師はどうしても疾患に注目しがちで、生活面に目が向かないケースが多い。生活を支援するには、利用者が日常生活をどのようにならしたいかに焦点を当てるのが大切です。当施設の利用者はいくつもの疾患を抱えている場合が多いので、生活の中で病気とどう向き合うかを大切に支援しています。糖尿病のため食事制限があっても満足できるように、毎日の食事やおやつを工夫するよう職員で話し合っています」

同施設では、医療必要度の高い利用者を受け入れていくために、職員教育にも力を注ぐ。経験年数により目標を策定し、計画的に教育。専門職や管理職を育成することで、組織としての力をつけていく計画だ。また、家族からの学びも重視しており、現在、気管切開患者の短期入所受け入れを目標に家族とともに支援法を確認中だ。

小原副施設長は「短期入所中も、家族と同様のケアを行うことで利用者の負担を減らしたい。家族からは『病院に行く生活がなくなる』という声もあり、利用者の生活を大切に考えています。利用者や家族の思いを支える役割を果たしていきたい」と目標を語る。

齋藤副理事長は、「地域を支えるために、社会福祉法人は外に出ていく必要がある。施設でのノウハウを地域に還元していくことが求められています。施設内に広い交流スペースを設けたのもそのためで、地域の人たちの交流活動などに活用してほしいと願っています。また、認知症講座なども開催し、当施設が地域支援の拠点になれるように努力していきたい」と話す。

(撮影：寺井信治)